

〔甲子夜話 四十八〕又話ス、久留米侯ノ高繩ノ別業ニ招カレテ往キシガ、ツノ園中ニ丹頂ノ鶴卵ヲ
 アタメテ居タリ、去年ノ雛モ見タリ、因テ其人ニ問フニ、年々一雙ツ、必雛出來ルトナリ、日數
 幾日ニシテカヘルト問ヘバ、三十六日目ニ屹下カヘルトナリト云、
 〔幕朝年中行事歌合 中〕二十九番 右 鶴御狩
 すべらきの千世のおもの、ためしとや鶴の御狩に君が出らむ

鶴の御狩は、内、仙洞、東宮へ參らせられんがために、御身づから狩に出させ給ふ也、意を得させ
 給ふまでは、御供の少老はせ參りて悦びをのぶ、是も霜月師走ごろにあり、この日從ひ參らせ
 し輩にも、鶴の血をえためる酒を賜ふときけり、

〔桃源遺事 四〕一西山公御隱居後、御山莊にて御放ち飼になされ候御秘藏の鶴あり、丹頂雌雄然るに西

山の御近邊の百姓天神林村の者也、名は長作と申候、あやまつて彼鶴を一つ殺候、此科にその者籠舍仰付られ候、

尤御秘藏といひ、右のもの屹と死刑に仰付られ候半と人皆存候處に、西山公那珂湊寅賓閣寅賓閣は亭也へ御入被遊候節、かの鶴殺しを御手自御せいはい有べきよし、御目付五百城茂大夫嘉忠に

仰付られ候に付、茂大夫承て是を下知仕り、彼罪人を御庭へ引出し、土壇を抱せ生けさのしかけ
 に仕候、西山公御出被遊、御刀をぬかせられ、彼鶴殺しがそばへ御立寄にくきやつ哉、鶴を殺した
 るがよきか、是がよきかと仰候て、四五度御刀を渠が肩に御あてなされ、つと御刀を振上られ候
 間、あはや最後と人みな守り罷在候處に、ふと御見かへり、中村新八願言に仰候は、斯まではしけ
 れど、此者を殺して候、迎鶴も生返り申まじ、禽獸故に人を殺し候事道にあらず候ま、たすけ可
 申やと仰ける、新八を始相詰候御近習のもの一同に感じ奉り、口々に難有覺し召の由申上候得
 ば、さらばゆるす、迎、死刑を御なだめ、御追放被仰付候、扱御存なき分にて、役人に御さし圖ありて、
 御内證より、當分彼者何方へも落著候はん迄のたくはへとして、飯米路錢等くだされ候、其子細